

令和3年度 学校だより 11月号 10月29日発行

横浜市中区山元町3-152
電話 641-4857



やまもと

横浜市立山元小学校
校長 石田 薫

自分を大切にできる子 共に生きる子 山元の子



『当たり前』の『有り難さ』

校長 石田 薫

暮秋の候、保護者の皆様、地域の皆様におかれましてはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。日頃より本校教育活動にご理解・ご協力をいただき、感謝申し上げます。

10月26日にオリンピック選手の西岡 詩穂さんが来校し、6年生が話を聞いたり、実際に競技に触れたりする体験をしました。ロンドンオリンピックとリオデジャネイロオリンピックに2大会連続でフェンシングの日本代表として出場したというオリンピック選手です。

西岡さんは、6年生からフェンシングを始め、中学生の時には、全国優勝を果たし、その頃から世界の舞台へと夢を馳せていたそうです。西岡さんは、いくつかの出会いと感謝の気持ちが自分を成長させ、オリンピック選手になれたと言います。

高校生の時、中学まで剣道をやっていた同級生の友達が入部し、共に練習をしました。練習では、常に西岡さんが勝ちます。何回練習で戦っても、西岡さんが勝ち続け、友達は、その度、悔しがっていました。『自分が勝つのは当たり前』と思い続けていた2年生になったある日、遂にその友達に負けてしまいました。その時に初めて、友達の努力と自分の傲慢さに、そして、『当たり前』は無いことによりやく気付いたそうです。

当たり前ということは、実は当たり前ではないことを知り、何が大切かを深く考えるきっかけとなりました。

そして、西岡さんから「当たり前の対義語は何だと思えますか。」

「感謝です。」

「当たり前というのは、当然のこと、有るべきことという意味なので、有ることが難しいことが対義語となり『有り難い』になります。」と話されていました。

私たちは日常生活を送っていると惰性に陥り、多くのことが「当たり前」の存在になりがちです。「毎朝、目が覚めること」は当たり前のことと思っています。毎朝目が覚めたことに「有り難い」と感動を覚える人はほとんどいないのではないのでしょうか。日々の生活に対し、私たちは「当たり前」と錯覚しているところがあります。「蛇口をひねると水が出ること」「電気がつくこと」「毎日ご飯を食べられること」も全て当たり前と感じ、災害など非常時になった時に初めて『有り難さ』がわかります。昨年からのコロナウイルスにより『当たり前』の生活が『当たり前』ではなくなり、今、毎日子供たちが学校に来ること、一緒に元気よく遊んだり勉強したりしていること、立ち止まって考えると改めて『有り難さ』を実感しているところです。

『当たり前』と考えてしまうところに、感動・感謝・幸福は生まれません。

まだ、以前と全く同じというわけにはいきませんが、『当たり前』の日常、『当たり前』にできることに改めて感謝します。

今月もよろしく願いいたします。